

## フィヨルド・フロム鉄道の旅

1995年夏、スカンジナビア半島のフィヨルドを訪れた。フィヨルドは氷河時代に地殻変動による氷河の移動によって岩山が削り取られた断崖絶壁と、スケールの大きな渓谷美で知られ、夏の旅行シーズンになると世界中の観光客がどっと訪れ賑わう。澄みきった空、そそり立つ岩肌、そして透明な川面のコントラストは譬えようもなく優美で美しい。

フロムとグドバンゲン間を遊覧船で往来するフィヨルド観光のためには、ノルウェーの港町ベルゲンから川畔の小さな町フロムまで、フロム鉄道（正確にはベルゲンからミュルダールまでをベルゲン鉄道、ミュルダールからフロムまでをフロム鉄道と呼ぶ）に乗車するのが最もオーソドックスなコースである。

北欧の小さな港町でありながら、ハンザ同盟都市として自治権を持ち、その経済力を楯に存在感を誇示していたベルゲンは、独特の味わいのある静かな街である。暗黒の北の海に臨み、背後は山に囲まれ、狭い町には箱庭のようなセンス溢れる可愛らしさが溢れている。ケーブルカーで昇った展望台から港町と周囲の鬱蒼とした雑木林を見ていると、「ペール・ギュント」や、「ソルヴェイグ」のような神秘的な名曲を生んだ、作曲家グリーグを輩出したのもムベなるかなと納得させられる。

朝10時20分にベルゲン駅を離れた、赤色のフロム鉄道は、静かな北欧の農村地帯を川沿いに進んでいく。川に並行して走るので、しばしば蛇行するが大きな揺れはない。長い編成の車両を後ろから見ると大きくカーブを切るのが見える。澄んだ川は速い雪解け水を満々と讃え、川床の浅い辺りでは、水が弾けて飛沫となり、それが岩の段差にぶつかるといくつもの小さな滝となる。川の向こうの小高い山から、白い糸が垂れるようにいくつもの筋条の滝が流れ落ちている。遥か山の峰々には白い残雪が見られ、車窓から眺める自然の艶やかさは、一幅の絵のようである。

やがてミュルダールへ到着する。ここでフロム行きの列車に乗り換える。ここからフロムまでの平均勾配は55/1000で世界一の険しさである。乗客はほとんど観光客で、車窓に展開される北欧の自然美に興奮したり、感激したりしている。程なくして、列車は中途半端な崖っぷちに停まった。駅ではない。先頭車両は半分くらいトンネルに頭を突っ込んでいる。何とショース滝「滝見台」なのである。右上から左下へしぶきとなって落ちこちてくる水流の、最高の見せ場へ「しぶきの降りかかる滝見台」を作り、走って来た列車を停車させて乗客に本物の滝に触れさせ、臨場感を味わわせているわけである。なんとまあ、サービス精神に溢れていることだろうか。乗客は子どものように狂喜乱舞、びしょ濡れになりながらバシャバシャ写真を撮っている。

この「滝見台」を出ると下る一方で、雪崩除けのトンネルを潜りながら左側の車窓から対岸の大地に目をやると、所々酪農農家が散在している。数え切れないほどの長く細い滝が流れ落ちているのが見える。眼下には大量の水量が激しい勢いで落ちていく。水沫が飛

び散り、虹が見える。なだらかな草つきの平地まで降りて来ると周囲の草花が咲き誇り、鮮やかな色合いが何とも言えず可憐だ。まもなく遊覧船の乗船場、フロムである。3時間ほどの観光列車ではあったが、フィヨルド観光に期待を抱かせる前奏曲として、快適な乗り心地と、車窓から見る自然美、そして滝飛沫の体験は、感動的な臨場感と陶酔感を味わせてくれた、ロマンチックな鉄道の旅であった。

近藤 節夫 記